

中国四川の客家の創出に関する文化人類学的研究
——成都市龍泉驛区洛帶鎮における儀礼と慣習の分析から——

星野麗子

本研究の目的は、中国四川省成都市龍泉驛区洛帶鎮及び村落社会に居住する客家と今日呼称されている人々を対象に、長期間にわたるフィールド調査を通して、1990年代から進む客家の歴史と文化を利用した観光開発、客家研究拠点の設立、客家の組織化と世界客家大会の招致を考察し、地域社会の儀礼や慣習の動態を分析し、近年生じている四川客家の創出のプロセスを明らかにすることである。

本論文は、序章と終章を含めた7章で構成されている。

序章では、本研究の目的および先行研究の整理、本研究の位置づけと課題、調査の対象と手法、論文の構成を述べた。客家に関わる先行研究を3つの時代区分に整理して分析した。これにより、客家の人々が黄河中流域の中原から歴史的に移動してきたといった研究がある一方で、移住先とされる現地社会に根差した客家の人々を論じた研究があるという、2つの流れを指摘した。そして、両者の相互関係を踏まえたうえで、客家が近年創出されている現状を示し、客家アイデンティティの研究の流れの中に本研究を位置づけた。客家研究における今日の課題、中国の客家研究における地域の偏りや、客家のアプリオリなイメージの浸透、客家アイデンティティ形成のプロセス分析に対する新たな視点の必要性の3点を指摘した。そして、沿岸地域から離れた西南部の内陸を対象地にし、客家に対する帰属意識がどのように生成されたのかといったプロセスを分析することにより、これまでの客家研究に対して本研究の地域性とアイデンティティの生成の両者の関係を考察するという独自性を提示した。

第1章は、客家という言葉が、いつ誰によってどのように記述されてきたのかを、中国や日本で収集した文献資料の調査を通して考察した。欧米のキリスト教宣教師によって客家と呼ばれる人々が注目されてきた先行研究を踏まえたうえで、中国国内での客家に対する研究の関心が高まっていった過程を論じ、最後に四川の客家に関する記述を分析した。四川客家の分析で明らかとなったのは、1940年代に研究者や知識人の間で、「客家」という言葉が「土広東」という言葉と併記されたり、方言や民族集団を意味する言葉として記述されてきたりしたことである。

第2章は、四川の客家をテーマとした観光開発が実施されている龍泉驛区洛帶鎮を対象地に、いつ誰によってどのように観光地として注目されるようになったのかを検討したう

えで、現地の人々の客家に対する語りから客家と土広東との関連性を考察した。1990 年以降帰国華僑、現地研究者や知識人らによって、同郷の人々が集いあう会館が保存されている洛帶鎮が、四川客家の文化資源として注目されていった過程を論じた。そして、今日、客家文化が食や建築物、観光ガイドなどにおいてさまざまな形で表象されていった内容を分析した。観光開発の発展の下、現地の人々が客家に対してアイデンティティを意識したり、あるいは強化していったりした過程が明らかとなった。

続く第 3 章では、洛帶鎮の中心地から村落社会に焦点を絞り、研究者や知識人、マス・メディアが注目している、B 村 L 姓一族の系譜および歴史について考察した。L 姓一族は、聖なる場所とされている祠堂を持ち、龍舞を継承していると伝えられている。彼らの祠堂には、19 世紀に刻まれた石碑があり、また家屋の壁には、2019 年に新たに造られた石碑がある。本章では、族譜資料をもとに L 姓一族の系譜関係を記したうえで、祠堂の石碑と新たに造られた石碑を分析したことにより、L 姓一族の移住の歴史、祖先との関係、19 世紀における規則や習慣の内容などを明らかにした。結果として、19 世紀の石碑には、「客家」という文字がなかったものの、当時の地方行政と深い関わりがあったことが分かった。他方で、2000 年以降書かれた族譜資料や、2019 年に新たに造られた祠堂の前の対聯や石碑に関しては、自らの出自に対して「客家」を強調した表象がみられたことが明らかとなった。

第 4 章では、村落社会において、年中行事の中で最も盛大に行われる、L 姓一族の祖先祭祀儀礼に着目して経年変化してきた祖先祭祀活動の動態を詳述した。祖先祭祀儀礼への参加者が減少傾向にあった中で、L 姓一族の代表者が宗親聯誼会を組織したことにより、散居していた L 姓一族の成員が次第に集まるようになっていった過程を論じた。これまで私的領域で行われていた祖先祭祀儀礼が、近年は「客家」を積極的に表象する公的領域で行われる儀礼内容へと変化していったことが明らかとなった。

最後の第 5 章では、現地の村落社会で伝承されてきた伝統行事と慣習について、長期フィールド調査によって得られたデータをもとに考察した。具体的には、春節、端午節、葬儀、民間医療、石敢当を取り上げた。これらは、現地研究者や知識人によって注目されてこなかった側面である。分析の結果、世代間の認識の違いによって慣習に変化が生じていたことを指摘した。現地の人々の日常生活に焦点を当てて描写することにより、客家研究および四川の客家に関する先行研究に対して民族誌のデータを補足することができた。

本研究で明らかとなったのは、次の 3 点である。

第 1 に、四川の客家をめぐる記述の変化とそれに伴う社会的影響である。20 世紀中葉までは、土広東や客族、客家民族などとカテゴライズされていた人々が、1990 年代以降、政

府の文化政策や観光開発の影響下で一貫して客家と記述されるようになったことで、他の客家地域との集団的、文化的共通点として、客家の意味が洛帶鎮を中心に浸透していった過程を明らかにした。第2に、観光開発にともなう客家をめぐる文化表象の選択が行われた動態である。「西部客家第一鎮」と今日称される洛帶鎮では、四川の客家に関わるさまざまな表象がみられた。これらの表象には、全く新たに作られたもの、客家イメージと現地の文化が融合する形で表象されたもの、現地に浸透している慣習などが客家の文化として転換されたものという文化の表象に関わる3つのパターンが明らかとなった。第3に、客家の文化として、見られていない現地の村人の日常生活の実践およびその変化である。既存研究では「客家らしさ」に焦点が当てられ、その他の側面は等閑視されてきた傾向にあった。それに対し本研究では、長期フィールド調査での観察で見られた現地の人々の日常的営為に注目して描写したことにより、「土広東」と客家の曖昧性や慣習の変化の内容を具体的に明らかにすることができた。

以上のように、本論文ではこれまで客家がいつ誰によってどのように書かれてきたのかといった歴史的過程と、現地での観光開発の動向を踏まえたうえで、村落社会のある特定の親族集団が行ってきた祖先祭祀が客家としての文化表象に選択された過程と、客家として見られていない日常生活の実践を、具体的な民族誌データの分析から四川の客家の創出を多角的に考察した。これは、これまでの客家のエスニシティのありかたが新たな局面に移行しつつあることを示すと同時に、エスニシティ論の重層性と流動性に関する研究に対し、新たな民族誌データを提示した。また、これまであまり研究の焦点が当てられてこなかった四川地域を取り上げ、地域的な偏りのあった客家研究の相対化を試み、四川の客家が、研究者や海外客家ネットワークなどと連携して形成されてきたメカニズムを解明することができた。

洛帶鎮の人々に関する民族誌的記述を通して、四川の客家の流動性と多層性を解明したことで、客家の創出に関する文化人類学的研究の展開に新たな一歩を踏み出していくことができると考えられる。